

ハリエンジュ（ニセアカシア）

牧 幸 男

初夏、新緑の木々の葉が夏の装いを始める頃、ニセアカシアの花が咲き始める。小枝いっぱい房状に垂れ下がって咲く花の姿は、誠に見事である。それまで葉の緑が勝っていたが、この時期だけは雪を被ったように白色が緑に映え、ひとしお美しく見える。花期が春から梅雨への合間、走り梅雨、あるいは若葉雨というような季節のため、せっかく咲いた花も、雨に打たれ樹下面に白く染める風景になってしまう。長野県の初夏の風物詩の「つけば」が盛んになる頃が丁度花期である。「つけば」とは、川魚のウグイの塩焼や天麩羅、田楽等の料理を提供するが、付け合わせにこの花の天麩羅が添えられる事が多い。

ニセアカシア（ハリエンジュ）は北アメリカ原産のマメ科の落葉高木、明治6年(1873)に渡来し、各地に庭木または街路樹として植えられている。マメ科の植物のため根粒菌が窒素を固定するため、痩せた土地でも良く生育するため、最近は山野などに野生化している。高さ20m前後に成長、枝葉はほとんど無毛で、托葉は通常針状になる。葉は互生し、有柄の奇数羽状複葉で、葉質は薄く、浅緑色、初夏の頃小枝上の葉腋から葉より短い長さ10～15cmの総状花序を垂れ下げる。白色の花の色は白色で蝶形花を開き甘い芳香を放つ。果期は10月、花の後に平たい5-10cmほどの鞘ができる。

この植物を、私たちはアカシアと呼んでいるが、植物学上ではハリエンジュが正しい。別名をニセアカシアとも言い、真のアカシアは別属の植物である。両種の呼び名はいささか紛らわしいが、わが国ではアカシアといえば普通このニセアカシアを指し、真のアカシアはミモザ、ハナアカシアなどと呼び区別している。植物学的な考察はさておき、私たちはハリエンジュより、一般に膾炙されているアカシアと呼んでも間違いはない。

類似植物に園芸品種で、新芽が美しい黄金葉で、庭木としてよく利用され、夏にはやや緑を帯びるが、秋は黄色になるニセアカシア・フリーシア(R. pseudoacacia 'Frisia')がある。別名を黄金アカシアと呼んでいる。1935年オランダで発表された園芸種で、我が国への渡来時期は不明。蓼科高原に「シンボルツリー 黄金アカシア ここから日本に広まった。」の看板がある。その他に赤い花が咲くパープルローブ(Robinia 'Purple Robe')がある。

ハリエンジュは明治時代に我が国に紹介された。紹介者は津田仙（津田仙の子供が梅子で、彼女は津田塾大学の創始者である。）が、明治6年（1873）ウィーンで開かれた万国博覧会に派遣された時、種子を持ち帰るとされている。そして、この種子から成長した苗を東京都千代田区大手町に植えたのが明治8年、これが日本初の街路樹となった。この事実は、大手町に「ニセアカシア Pseud-Accacia L(ハリエンジュ・針槐樹)マメ科(市内最初竝木)」の石碑と「市内最初の並木 明治8年ニセアカシアをこの道路に植えた。蘭学者津田仙翁が明治6年ウィーン万国博覧会の際に種子を持ち帰り育成したもので、外来種による東京市の最初の街路樹である。なお、現在この通の街路樹はエンジュである。」と記述した東京都の明板が立っている。



ニセアカシアの花



フリーシア（薬草の森りんどう）

その後日本各地に植えられるようになり、最初北海道に多く植えられた。この花をエキゾチックでどこか西洋風な感情を抱く人も多く、詩歌や小説の題材になってきた。北原白秋の童謡「この道」(山田耕作作曲)には「この道はいつか来た道 ああ、そうだよ、あかしゃの花が咲いてる」の歌詞がある。白秋はこの歌を郷里の柳川市に咲いていたアカシアと開拓当時の札幌のイメージを重ね合わせて作詞したと言われている。年配の方には「アカシアの雨にうたれて、このまま死んでしまいたい・・・」と、西田佐知子の歌とダブらせて思い出す方もおられかもしれない。水木かおる作詞のこの歌は、60年安保時代の世相を象徴するような暗い印象を与えているような気がする。



あかしゃの花ふり落とす 月は来ぬ 東京の雨 わたくしの雨 北原白秋
 ともすれば アカシアの花 匂う夜ぞ 上村占魚

牧野富太郎博士は「世間一般では本種をアカシアと呼んでいるが、これは真のアカシアではない。日本名は針 槐 樹で、エンジュに似て針があるため。」と述べている。別名にはアカシア、ニセアカシア、イヌアカシア、擬合歓等がある。本物のアカシア属はオーストラリア原産の黄色花の灌木で、改良品種が前述のミモザやハナアカシアと呼ばれ、切り花として利用されている。アカシアと呼ばれるようになった由来は、ロビニー属の日本のアカシアが、アメリカから輸入された当時、単に「アカシア」と呼ばれていたのがそのまま今に続いてしまった。学名は *Robinia pseudoacacia* で、属名はパリ植物園に初めてこの木を植えた、17世紀のフランスの植物学者Robinの名、種小名のpseudoは「似ている」意で、アカシアに似ている植物の意味になる。

薬用は日干した蕾を子宮出血、利尿、切り傷等に利用、樹皮は糖尿病などに利用する。但し、葉、果実、樹皮には毒性があり、樹皮を食べた馬が中毒症状を起こした例がある。

食用は、蕾や花、少量の若の芽は食用になる。花をホワイトリカー漬ける薬用酒は強い甘い花の香りがする。また、養蜂業者には、貴重な蜜源植物である。現在、蜂蜜生産量の40%がニセアカシアによる言われ、特に長野県は蜂蜜70%がニセアカシアの花を「蜜源」としている。ヨーロッパに6月頃訪れると花が蜂蜜の原料となるため、様々な場所でのこの花にお目にかかる。

一方で、ニセアカシアはマメ科植物のため根粒バクテリアが繁殖して土壌が肥えるため、砂防地や造林に植えられているが、最近は繁殖力が強すぎると嫌う人もいる。この問題は「ニセアカシアが渡来後、アカマツやクロマツなどのマツ林、ヤナギ林の育成を妨害し、海岸域や溪畔域の景観構造を大きく改変させた。好窒素性草本やつる植物をともなって優占し、植生の構成に変化させている。」という意見もある。このような理由から日本生態学会は本種を日本の侵略的外来種ワースト100に選定した。日本では外来生物法の「要注意外来生物リスト」において、「別途総合的な検討を進める緑化植物」の一つに指定されたこともあった。この「要注意外来生物リスト」は「生態系被害防止外来種リスト」の作成に伴い平成27年3月に廃止され現在は後者のリストに記載されている。2007年秋には天竜川、千曲川流域の河川敷で伐採作業が行われた。しかし、一方で、要注意外来生物に指定された根拠については科学的に証明できないとして反論している報告もある。

しかし、成長が早く痩せ地でも育つこと、耐久性が高いため、以前は線路の枕木、木釘、木炭、船材、スキー板などに使われた。特に、1950年代まで、一般家庭の暖房や炊事、風呂の焚きつけなどに使う火力は、ほとんどが薪や炭に依存していたため、ニセアカシアは大変有用な植物であった。北海道に多く植えられたのも、寒冷地の暖房用燃料としての需要が多かったためである



花言葉は「優雅」「真実の愛情」「慕情」「親睦」「友情」「優雅」「頼られる人」「死に勝る愛情」である。